

【同和問題の解決にむけて】

北海道発「それ、おかしいっしょー」

若手教師パワーアップセミナー「元気が一番」塾主宰 仲島 正教

昨年3月末で、私は26年間の教師生活を終え、新しい道を歩み始めました。新しい仕事の一つ目は、若手教師の育成セミナーの実施であり、二つ目が講演活動、三つ目はNPO※1の活動です。今回はその中の講演活動を通して感じてきたことをお話ししたいと思います。

☆同和問題への関心は・・・

昨年4月以降、九州、四国、中国、近畿、東海、北陸、関東、北海道と、ほぼ全国を回ってきました。講演の内容のほとんどは人権教育に関するのですが、中でも同和問題に関しては、地域間の温度差をかなり感じることになりました。私自身の体感としては、やはり東に行けば行くほど、同和問題への関心は低いような気がしました。

北海道の例を出してみましよう。講演のテーマは人権教育を基盤とした「地域づくり」と「子育て」でしたが、講演会のあとの懇親会で地元の方から質問が出ました。

「同和問題についてもう少し教えてください。私らほとんど何も知らないので・・・」
私は懇親会という席ではありましたが、真顔になって説明を始めました。するとその方は「それ、おかしいっしょー」

と言。その表情は、まるで子どもが何かに出会って驚いた時のようでもありました。こんな差別があつていいはずがない。なぜ、そんなことをするんだ。その言葉には怒りも含まれているようでした。

私が訪れた北海道黒松内町は、長万部の近くにある人口3千人余りの小さな町です。この町は別名「福祉の町」といわれるように、子どもから老人までの福祉施設が20近くもあり、町の3分の1の人が、何らかの形でこの福祉施設に関わっておられます。私はこの町に5日間滞在し、学校訪問等もさせていただきながら、たくさんの方々と会うことができました。その中で私が感じたことは、とにかく優しい人たちで、ここは温かい町だなあということでした。

そんな温かい町で、同和問題のことを話すと「それ、おかしいっしょー」と言われるのです。同和問題の学習をしていなくても、それはおかしいという心が日常の生活の中で根付いているのです。私はこれが堀井隆水先生の言われる「氷山の一角論※2」なのではないかと思うのです。つまり「差別という冰山」をなくすためには、海面上に見えている氷を上から削るだけでなく、海面下の見えない所の氷を溶かすことが必要である、そのためには「海水の温度」を上げてやることであり、この「海水の温度」こそが「日常の人権意識」のことである、差別の解消にはこの「日常の人権意識」の高まりが必要だということなのです。

☆身近な人を愛することから・・・

同和問題には根深いものがあります。だからこそ学習をしっかりしていかなければいけません。しかし同時にその基盤となる人権意識（海水の温度）を高めることが必要です。つまり日常の生活の中での「温かいつながり」をどうつくり出していくかが大事になってきます。まず家庭の中を見つめてみましょう。家族が温かな風につつまれているでしょう

か。次に学校の中を見つめてみましょう。どんな仲間づくりがされているでしょうか。地域の中を見つめてみましょう。あの人この人の顔が浮かんでくるでしょうか。そんな身近なつながりを今一度見つめ直してみたいものです。まずは身近な人を愛することからです。この小さな取り組みこそが、実は同和問題の解決への一番大切なことではないかと思っています。

私は、これからも全国各地をまわりながら、同和問題の解決にむけて、微力ではありますが講演活動を続けていきたいと思っています。「それ、おかしいっしょー」の声が全国各地で発せられることを願って・・・。

※1 NPO 法人「にしのみや教育サポート」(事務局 0798-51-6602 久野)

※2 堀井隆水著「人権文化の創造」(明石書店) P.28 ‘冰山の一角論’

西宮市人権・同和教育協議会 きづき」第137号 原稿

平成18年(2006年)3月10日